

76

目付海防掛（蕃書調書総裁）大久保忠寛の  
「病幼院創立意見」安政4年（1857）について

稲松 孝思

東京都健康長寿医療センター 臨床検査科部長

大久保右近将監忠寛（1818～1888）は、幕末に老中・阿部正弘（1819～1857）が登用した幕府海防掛の開明派官僚の1人である。ペリー来航後、防衛の重要性が叫ばれる中で、旗本の軍事訓練のための講武所、西洋の技術・知識導入のための蕃書調所などが設けられたが、目付の大久保は、講武所の充実に当たると共に、蕃書調所総裁を兼帯している。この時期の安政4年（1857）1月、「病幼院創立意見」を幕府に提出しているが、病院は定員500人、洋方医13人、介護人170人を抱える。幼院は300人を扱う予定で、保母300人、牛乳を得るための牛100匹、牛飼い50人の大規模なものである。番町菜園の敷地を想定し、人事（西洋医）、給与、夜具やおむつの予算もあり、七分積金様の財政基盤を想定し、小石川養生所の洋方版としてかなり具体的な構想である。この構想の元になるのは、清国人魏源の『海国図志』などである。本書は1853年に先輩の海防掛川路聖謨が江戸で翻刻出版しており、大久保忠寛は日本で最も早い時期の読者であったと思われる。この海国図志は、横井小楠（後に大久保忠寛と親交を重ねる）を攘夷主義から開国主義に大きく転向させるなど、幕末知識人の西欧理解に大きく貢献した書である。

大久保は、意見書提出の翌月、阿部正弘に長崎奉行を任命されたが、赴任を辞退、勘定奉行の水野忠徳が兼帯後、長崎海軍伝習所取り締まりで目付の岡部長常（1825～1867）が、12月に昇任した。この年の5月にオランダ軍医、JLC ポンベ・ファン・メールデルフォールト（1829～1908）が、長崎海軍伝習所の教官として来日している。長崎奉行の岡部に西洋式病院の設立を提案し、その理解・支援の元に1861年、日本で初めての西洋式病院「長崎小島養生所」の設立にこぎ着け、松本良順を中心とした系統的な医学教育を開始している。大久保忠寛、平山敬忠、岡部長常は、幕府高級官僚の同輩として昵懇の仲であり、ポンベを感激させた岡部長崎奉行の多大な協力は、この意見書の考えを共有したことによると思われる。また、1862年の竹内遣欧使節派遣時、購入予定書リストに病院運営法が含まれているが、この時の外国奉行は大久保忠寛であった。

米・英などとの和親条約、水戸密勅、安政の大獄、大政奉還、鳥羽伏見の戦いなど、幕末の政局の渦中において、大久保は左遷・登用を繰り返し、元治元年（1864）に家督相続後は隠居名“一翁”を名乗っている。江戸開城前後は、会計総裁、若年寄（勝海舟の上司）として、幕府官僚の最高位にあり、治安維持、幕府財産の引き継ぎに当たり、巨額の七分積金も明治政府に引き継いでいる。明治維新後は静岡の徳川家の運営に携わっているが、この時、パリ万博の江戸幕府代表团（徳川昭武）の庶務係として、ヨーロッパから帰国した渋沢栄一に出会い、徳川家に割り当てられた太政官札を主な原資とする商法会所の運営を任せている。明治5年（1872）、西郷らによる幕臣の登用により、文部省2等出仕、ついで東京府知事に任官している。この時、江戸の町会所は営繕会議所、七分積金は共有金に再編成され、東京の都市基盤整備に使われたが、当時、明治政府にあった井上馨・渋沢栄一がこれに関与している。大久保府知事は、営繕会議所に貧民対策を諮問し、救貧三策の答申を得、その具体的な手段として、「養育院」が作られた。それは、大久保が15年前に幕府に提案した、「病院・幼院」の実現の第一歩を、上野戦争の戦場跡（本郷加賀屋敷・上野護国院）に印すものであった。養育院は、その後、渋沢栄一らが守り育て、日本における医療・福祉施設の草分けとして発展していった。